

石田雄（政治学研究者／東京大学名誉教授）

「まもなく 94 歳になる老人ですので、みなさんに直接お話しするのではなく、このような形でメッセージを送ることをお許し下さい。

2011 年 3 月 11 日の原発事故は長い間日本の政治を研究してきた私にとって大変大きなショックでした。というのは、1986 年のチェルノブイリの事故の時に、私は西ベルリンで生活しており、毎日食べる物がどこで作られたかを点検していたので、本来なら日本の原発についても十分に注意する必要があったはずですが、東京電力の年間 4 百億円を超えともいわれた広告費を使う世論操作の影響で、「日本の原発は安全だ」と信じ込まされていたのです。

このことを私は恥ずかしく思い、すぐに原子カムラの構造を調べることにしました。その仕事はあまり難しいことではありませんでした。というのは、1970 年代の終わりの 3 年間、夏には水俣病に行って水俣病の調査をしていたからです。原発事故の原因も根本は同じで、要するに「弱い者を犠牲にして経済成長を急ぐ」という日本の近代的発展の体質から生み出されたものだと言えます。

ただ、水俣病との違いもあります。最近水俣病患者の一人が指摘していたように、水俣病の場合は目に見える魚を食べて起こる問題ですが、原発事故は放射能という目に見えないものの影響がいつ、どういう形で現れるかが分からないという点がやっかいです。

原発事故が明治以後、敗戦によっても変わらない体質に根ざすものであることは明ら

かになりました。しかし、この体質が長く続いているものなので、それを克服するのは簡単ではないということも明らかになりました。

この体質を克服することの難しさは、原発事故で本当に困っている人が声をあげにくいということと関係しています。一つ例をあげれば、指定されていない地域から母親と子供で避難した場合、十分な補償を得られないだけでなく、帰る場所があるのに帰らないと非難されるなど、いろいろな社会的圧力のため、苦しさを声に出せないケースが多く見られます。

しかし、希望の持てる新しい現象もあります。3.11以降毎週金曜日にみなさんが官邸前に集まり、警官との衝突を避ける慎重な配慮によって家族連れでも集まれるようになり、原発を止めようという声を大きくすることができるようになりました。

しかし時間が経つと次第に原子カムラはまた昔と同じやり方で避難指示・解除などで補償の義務を軽くして、国内で原発の再稼働をするだけでなく、海外に向けて原発輸出までしようとしています。

このような方向に反対して、政治を変えるためには、権力の暴走を防ぎ、平和的生存権を守るために主権者として声をあげる持続的な努力が必要だと思います。そのためにここに集まれたみなさんに心から敬意を示すと同時に、今後一層のご健闘を祈ってご挨拶とします。